

河川生態学術研究会について

河川生態学術研究会 委員長 山階鳥類研究所長 山岸 哲

「河川生態学術研究会」は、河川の生態系に焦点を当て、河川の構造と機能、さらにそれらを支えている自然のシナリオを明らかにし、河川管理への新たな貢献を目指そうと、おもに大学の生態学者・土木工学者、建設省土木研究所（現在、独立行政法人土木研究所・国土交通省国土技術政策総合研究所）などが協力し合い、今から約10年前の平成7年に発足しました。

この研究会発足当時の背景として、二つの大きな契機がありました。一つは、建設省（現国土交通省）が平成6年1月に定めた環境政策大綱で、河川行政においても環境を積極的に取り込むことが定められました。もう一つは、平成7年9月の河川審議会で、河川行政に対して「生物の多様な生息・生育環境の確保」「健全な水循環の確保」などを積極的に取り入れることが答申されました。

このような背景のもと、これまで個別に研究を進めてきた生態学と河川工学の研究者が「河川生態系」という共通のテーブルに着き、これまで知見の少なかった河川という変動する環境下での生物の生活と、集水域を含めた河川生態系の機能と構造が、河川環境に及ぼす影響を明らかにしつつ、河川の本質の理解を深めることが重要であるという認識に至りました。そこで、両者が共同して「河川生態学術研究会」を創設し、河川生態に関する総合的な研究を進めることになりました。

「河川生態学術研究委員会（親委員会）」は、早稲田大学名誉教授大島康行博士を委員長として、当初一年間をかけて、河川生態系についての議論を慎重に重ね、研究の目的と進め方を検討しました。その大筋は『河川の自然環境の解明に向けて』というパンフレットにまとめられ、その後の指針となってきましたが、これも平成16年12月には第4版を重ねており、英語版も用意されています。

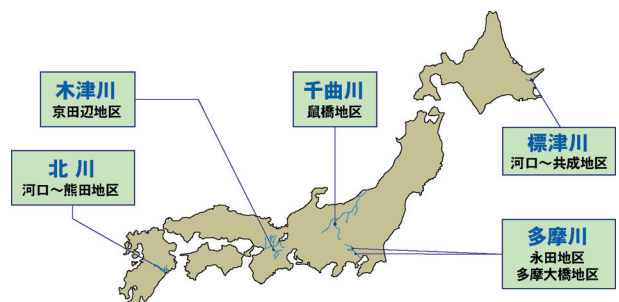
この特集号に取り上げられた多摩川、千曲川、木津川、北川、標津川は、以下に示した河川生態学術研究の6つの目的を達成するために選ばれた、それぞれ特徴がある河川です。

多摩川と千曲川はこの河川生態学術研究の第一期生とも言える河川で、ともに平成7年度から研究を開始しました。続いて木津川が平成10年度から、北川では洪水に伴う激特事業と連動する形で平成11年度からそれぞれ研究を開始しています。さらに、平成16年度には北海道の標津川で新たに研究がスタートしました。

これらのうち、多摩川、千曲川、木津川、北川の4河川では、第一期3年間の研究成果が大冊の「総合研究」としてまとめられ、多摩川と千曲川では、さらに第二期の研究成果のとりまとめが進んでいます。

河川生態学術研究の6つの目的

- I. 河川流域・河川構造の歴史的な変化に対する河川の応答を理解する。
- II. ハビタットを類型化し、その形成・維持機構、生態的機能を明らかにする。
- III. 生物現存量、種構成、生物の多様性、物質循環、エネルギーの流れを明らかにすることにより、河川生態系の構造と機能を解明し、河川に対する生物の役割を明らかにする。これらを用いて河川的环境容量を推定する。
- IV. 洪水や渇水などの河川が本来持つ攪乱などの自然のインパクト及び河道や流量の管理、物質の流入などの人為的インパクトの影響を明らかにする。
- V. 河川環境の保全・復元手法を導入し、その効果を把握・評価する。
- VI. I～Vに関する結果を総合し、生態学的な視点を加味した河川管理のあり方を検討する。



また、親委員会では今後は各河川の研究成果を相互に比較し、河川生態系の一般性と個別性を浮き彫りにする目的の研究が企画されるなど、より総合性を目指した研究の発展が期待されており、河川生態学術研究会も一つの成熟・転換の時期を迎えているとも言えます。

最後に、この「河川生態学術研究会」は、物心両面で国土交通省河川局、地方整備局、対象河川の河川事務所の方々に全面的なご協力と適切なお意見をいただきながら実施しているものであることを申し添えておくと共に、関係する皆様に厚くお礼申し上げます。

また、研究会の発足から現在にいたるまで事務局を引き受けていただき、全ての事務処理と諸々の準備をしていただいている、財団法人リバーフロント整備センターの竹村公太郎理事長を始め、歴代の担当の方にもこの場を借りて厚くお礼申し上げます。